

松任谷正隆の

# イニ業のひとりごと

20

VOL.20 豪邸

あれは高校3年生の頃だったどうか。

電話に出るとなんだかそれは聞き覚えのある声だった。「私よ私」私って誰?なんだか嫌な予感がした。

電話の相手はその昔、僕がベースを教えたことのあるプロレスラー・・・じゃなくて、がたいの大きな女子だった。

この連載にも一度書いたけれど、彼女との思い出は、我が家応接間での攻防しかない。

彼女に追い回され、逃げ惑う僕。情けない、といったって中3で女子なんて知らない僕である。

好みでもない女子に迫られたら怖いに決まっている。

学園祭まで、という約束で何回か教えたのだが、毎回、なんだか怪しいムードになって逃げ回っていたっけ。

その私が何の用か、と言えば、また学園祭がある、と言う。

「でも安心して、今度は後輩達だから・・・」

なぜ引き受けたのか分からぬけれど、今度こそちゃんとした女子達と知り合いになれる、とでも思ったのだろうか。

後輩からの電話はその日のうちにかかってきた。可愛い声の女子だった。一瞬色めき立つ自分。

いや待て。前回も変な期待をしてこんなことになったじゃないか。

で、どうすればいいのか、と聞くと家に来てくれ、と言う。家は赤坂らしい。

当然カーナビはおろか、携帯などもない時代だから、

住所を聞いて、目印になるようなものも聞いて、

愛車カローラで向かった。

確かカアパートの隣と言っていたな。

カアパート?力道山か?まあいい。

途中交番で道を聞きながら言われたところに

向かうと、まさか、と思われるよう

小山のような鉄の門がスープと開いた。

まるでお城の入り口みたいだ。



この門を入り、どうやらこの山を登っていくらしい。

前とは別の恐怖に駆られる。なんだかあの学校の人達は変わった人たちばかりだ。

とりあえず門から 200 メートル以上はあったと思うが、森の中を抜けて登っていくとようやく大豪邸が見えてきた。

デカいアメリカ車が 2 台ほどぶっきらぼうに停められている。

こんな家、映画でも見たことがないぞ。

豪邸の前でカローラを停めると、バラバラと中学生の女子達が家から出てきた。夢を見ているみたいだった。

女子達はやたら馴れ馴れしく僕を迎え、僕は恐る恐る家の中に入っていった。

実を言えば、この後何回も行ったにもかかわらず、家の構造を僕は知らない。

もっと言えば玄関がどうなっていたのかも覚えていない。いや、玄関から入っていなかったような気もする。

とにかくやたら広いリビングにドラムセットやらギター・アンプやらがちょこんと置いてあって、

そこで練習をしているらしい。

これまた見たこともない大きなソファに座られ、

さあ、それじゃあ始めるから見ていてくれ、と言う。

メイドが何人かいて、入れ替わり立ち替わり

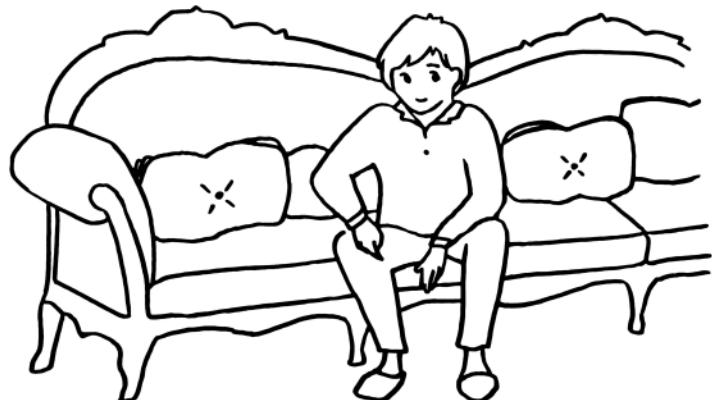
飲み物を出してくれる。裏にはシェフが

数人働いているそうだ。もうそれだけで、

こちらは萎縮してしまって他の部屋を見せてくれ、

なんて言う気にもなれない。

相手が中学生だというのに、だ。



遠く向こうで何匹かのドーベルマンが吠えているのが聞こえる。

ここはどこ？ 僕は誰？ ひょっとして宇宙の果てか？

僕の半生で、これ以上凄い家は・・・少なくとも日本では見たことがない。



松任谷 正隆（まつとうや まさたか）

作編曲家、音楽プロデューサー。

4歳からクラシックピアノを習い始め、14歳の頃にバンド活動を始める。

20歳の頃プロのスタジオプレイヤー活動を開始し、

バンド“キャラメル・ママ”、“ティン・パン・アレイ”を経て、数多くのセッションに参加。

その後アレンジャー、プロデューサーとして多くのアーティストの作品に携わる。

鈴木茂、小原礼、林立夫とともにバンド SKYE を結成。

2021年10月、デビューアルバム「SKYE」をリリース。

日本自動車ジャーナリスト協会に所属し、「日本カー・オブ・ザ・イヤー」の選考委員も務める。

著書に「松任谷正隆の素」「おじさんはどう生きるか」などがある。

イラスト：W.Valy